

Title	<特集> 『心の教育』を考える --家族の理解とその支援-- (特集I: 第21回リカレント教育講座シンポジウム抄録)
Author(s)	野末, 武義; 内田, 利広; 鳥井, 敬子; 岡野, 憲一郎; 松下, 姫歌
Citation	京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要 = The Annual Bulletin of Praxis and Research Center for Clinical Psychology and Education (2019), 22: 4-32
Issue Date	2019-03-28
URL	http://hdl.handle.net/2433/237840
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

特 集

第 21 回リカレント教育講座シンポジウム抄録

『心の教育』を考える

—家族の理解とその支援—

(2017. 8. 20 於：京都大学百周年時計台記念館)

シンポジスト：野末武義（明治学院大学心理学部心理学科教授）

「子どもの心と親の夫婦関係：家族療法とアサーションの観点から」

内田利広（京都教育大学教授）

「学校臨床における家族への支援—親の期待をめぐって」

鳥井敬子（京都市教育相談総合センターカウンセリングセンター

カウンセラー）

「学校現場での家族支援」

挨拶：岡野憲一郎（京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター長）

司 会：松下 姫歌（京都大学教育学研究科准教授）

<挨拶> 岡野憲一郎 臨床教育実践研究センター長

みなさん、おはようございます。今日は本当に暑い中、お運びいただきましてありがとうございます。私は臨床教育実践研究センターの岡野と申します。リカレント教育講座ということで、無事に 21 回を迎えることができました。といっても 3 年くらい前、一回台風で流れたことがありまして、それ以来、この時期に台風がくるのをいつも心配しておりました。今日は、おそらく台風は、これからはもう来ないだろうということで、皆さん無事に帰って頂けると思います。

今日は家族の理解とその支援ということで、今日の日が、みなさんにとって多くの学びの体験となることを祈っております。それでは今日一日どうぞよろしくお願い致します。

松下：それでは午前の部のシンポジウム、「家族の理解とその支援」を始めさせて頂きたいと思います。

本日は、3名の先生方をお招きしております。ご登壇頂く順にご紹介させていただきます。まず、お1人目、明治学院大学教授 野末武義先生。それから、京都教育大学教授 内田利広先生、京都市教育相談総合センター カウンセリングセンター カウンセラーの鳥井敬子先生です。これから、3名の先生方に30分ずつお話し頂いて、少し休憩をはさみまして、全体での質疑応答と討

論を行う予定です。それでは最初に、野末武義先生に「子どもの心と親の夫婦関係：家族療法とアサーションの観点から」というタイトルでお話し頂きます。

簡単ではございますが、野末先生のご紹介をさせていただきます。野末先生は立教大学文学部心理学科をご卒業後、国際基督大学大学院教育学研究科を修了され、文教大学越谷保健センター相談室、立教大学池袋学生相談所、医療法人社団草思会クボタクリニック、国立精神神経センター精神保健研究所児童思春期精神保健部などを経て、現在は明治学院大学心理学部心理学科にて教授を務めておられ、臨床心理士養成指定大学院における教育訓練、研究に長く携わっておられます。ご専門は家族心理学であり、一般社団法人日本家族心理学会の理事長も務めておられます。野末先生は夫婦や家族に対する心理療法に対して、大変造詣が深い先生であられまして、特に個人療法が重視してきた、個人の心理と変容の理解と、夫婦家族療法が追求してきた関係性と変容の理解と、その両方を統合した心理療法についての研究および実践を重ねておられます。そういった統合的な心理療法の専門機関であります、IPI 統合的心理療法研究所の所長も務めておられます。家族心理学やアサーショントレーニングに関する著書も多数執筆されておられます。最近の著書としては、「夫婦・カップルのためのアサーション：自分もパートナーも大切に自己表現」などを出版なさっておられまして、大変ご活躍の先生でおられます。それでは野末先生、よろしくお願いいたします。

<シンポジスト 1> 野末武義（明治学院大学心理学部心理学科教授）

「子どもの心と親の夫婦関係：家族療法とアサーションの観点から」

おはようございます。ただいまご紹介にあずかりました野末と申します。どうぞよろしくお願いいたします。普段は大学の方で学部と大学院で教育しております。臨床のほうは IPI という所でやっているのですが、私がずっとやっているのは家族療法とかカップルセラピーといわれるのが主ですので、ほぼ一対一の面接は、今ほとんどやっておられませんで、大体、ご夫婦揃っていらっしゃるとか、お子さんの問題でお子さんとご両親が一緒に来るという、そういう合同面接の形態のことが多くなっています。その中で特に最近、カップル・夫婦の問題が非常に多くて、ご夫婦の合同面接をやる機会がとても多いです。時にスクールカウンセラーの先生とか、あるいは児童精神科の先生から、「子どもに問題がある。ちょっと両親の夫婦関係もなかなか大変なので」というふうに言われてリファールをされてきて、ご両親が面接を受ける、ということも増えている、という感じです。ですので、今日のお話が、どれくらい参加者の皆さんにとって、ピンとくるお話なのか、ちょっと不安です。普段私がやっている臨床の中で考えていることや、その元になっている考え方とかを少しお話しさせていただいて、何か今日参加された皆さんのどこかに繋がればよいなと思っております。タイトルとしては「家族療法とアサーションの観点から」というのがサブタイトルになっていますが、子どもの心と、それから親の夫婦関係というものについていろんな角度からお話をさせていただきたいと思っております。

まず、家族療法にから見た夫婦関係の変化というものですが、私は大学院を出てからすぐに家族療法とかの勉強始めました。もう 25~6 年経ちます。当時と比べてこんなふうに最近変わってきているとい

う、あくまでも私の臨床現場での感覚であり、近くにいる臨床家の意見でもあります。こんなことがあるかなと思います。

まず以前は、夫婦の問題はカウンセリングの主訴にはならないと言われていました。日本ではですね。ところが最近、予約の段階から夫婦の問題を訴えるケースが非常に増えてきております。最初から夫婦の問題だと言ってくるというケース。それから日本の父親っていうのは、カウンセリングに来談しないということが言われていました。最近では来談を拒絶する父親が非常に少ない、むしろ母親の方が来談を拒むというケースを経験するようになりました。もしかしたら、これは東京と関西とで違う面もあるのかもしれない。

それから夫婦や家族の問題というのは、大抵、妻あるいは母親からの申し込みがほとんどだったのですが、今でも割合としては多いです。それにも関わらず、夫あるいは父親から夫婦の問題で困っている、あるいは子どものことが心配だ、ということで申し込む場合が増えてきています。それから最近、芸能人を中心に浮気不倫の問題が非常に賑やかになっています。浮気は男の甲斐性と昔は言われておりました。ケースとして浮上してくるのは、妻の浮気のケースというのもジリジリと増えてきているということがあります。

さらに実家との問題ですね。以前は夫とその母親との強い結びつきがあって、これがいわゆる嫁姑問題になっていました。それに加えて、妻とその母親が非常に強い結びつきがあって、ある意味で夫が弾き出されている、そういうケースをよく経験致します。そして夫婦のパワー関係で言えば権威的で支配的な夫というのも、たしかに今でもいらっしゃいますが、どちらかというところでは 50 代 60 代以上のご夫婦ではよく見られます。年齢が若くなると、妻の方がより攻撃的で支配的、というケースもよく見ます。

それから夫婦の夫婦関係満足度という調査が、発達心理学あるいは家族社会学という分野ではよく行われています。いつ調査がやられても、必ず言われるのが、夫よりも妻の夫婦関係満足度が低いということです。これは何年たっても変わらない傾向です。最近の調査では、夫の夫婦関係満足度もやや低下気味であるということも言われています。これが果たして悪いことなのかどうか分かりません。夫婦関係に対する満足度というのは、夫婦関係を見ていて、そこに期待があるから満足度が低い、という可能性がありますので、逆に言いますと、今までの日本の夫はあまり夫婦関係に目を向けていなかったもので、夫婦関係の満足度が高かった可能性がありますので、一概にこの結果が悪いことかどうか分かりません。

それから夫婦合同面接ですが、私がやっている IPI という所では、セラピストも 2 人、男女でペアを組むのですが、男女 2 人のセラピストと夫婦というふうな、ちょっと特殊な構造でやっているのです。以前は夫婦一緒に受けるのは嫌だとおっしゃる方が多かったです。今でもときにはいらっしゃいます。最近では、むしろ 2 人一緒に受けたいと言って来られる方が増えてきました。よくよくそういう方たちの話を聞いていると、既にどこかでカウンセリングを受けられて、一方の話しか聞いてもらえなくて、余計に関係がまづくなったとか、公平に話を聞いてもらえなかった、というような体験があって、なるべく夫婦の話を分け隔てなくというか、平等に聞いてほしい、そういう訴えがよく聞かれるようになりました。

こんないろんな変化がどの程度、普遍的にいえるかどうか分かりませんが、こういうことも踏まえな

がこれからいろんな角度からお話しをしていきたいと思えます。

まず、「夫婦のコミュニケーションと子どもの心」ということで、アサーションの観点からお話をさせていただきます。ちなみに、今日の午後、沢崎俊之先生が講師の1人でお見えになりますが、沢崎先生と私は、ちょうど同じ時にアサーショントレーニングのトレーナーになるためのトレーニングを受けました。もう20数年前ですが、そのアサーションということについて少しお話をしていきます。

まず、アサーションとは何か、アサーショントレーニングとかアサーティブネストレーニングとかアサーティブトレーニングとかいろいろあります。ここで「アサーション」というのは、自分の考え・欲求・気持ちなどを率直に、正直にその場の状況に合わせた適切な方法で述べること、それから他者の基本的人権を侵すことなく、自己の基本的人権のために立ち上がり自己表現すること、こんなふうに定義されています。一言でいうと、自分も相手も大切に自己表現です。時に自己主張というふうに訳されることがあります。あるいは自己主張トレーニングというふうに言われることもある。しかしアサーショントレーニングを学んだトレーナーたちは、あまり「自己主張」とは言いません。

なぜならば、日本人はどちらかというと自己主張に対して否定的に捉えがちだと思います。例えば、あの人は自己主張が強い、という、ほぼ意味合いとしては、わがままだ、言いたい事しか言わない、そういう感じになってしまいますので、相手のことを大切にするっていう意味が、ちょっとわかりにくくなってしまいますので、自分も相手も大切に自己表現、自己主張ではなく「自己表現」というふうに考えます。

このアサーションでは、私たちの自己表現のし方、別の言い方をすればコミュニケーションのあり方とか、あるいは対人関係の持ち方、さらに言えば、生き方にも関わりますが、大きく分けると3つのタイプに分けられると考えています。

まず1つ目は、「非主張的な自己表現」です。これは、自分の事は二の次にして相手のことを優先する、という自己表現、コミュニケーションです。I'm not OK, you're OK.という、そういう感じ。自分の考えや気持ち、欲求などを率直に表現しなかったり、表現し損なったりすることで、自分自身の人権を自ら侵してしまう、ということです。あるいは、言っではいるけれど、言い訳がましく言うとか、遠慮がちに言う、遠回しに言う、引っ込み思案に表現するために、相手に自分の言いたいことが伝わらない、無視されやすくなるような言動。こういったことも「非主張的な自己表現」です。「非主張的な自己表現」というのは、「言わない」とか「言えない」ということだけではなくて、「言っではいるけど伝わりにくい言い方」、こういったものも含めて、「非主張的な自己表現」と考えます。なぜこういうことになるのかという要因はたくさんあります。自分と相手の違いを恐れる、そこがなかなかうまく受け入れられない、ということから相手に合わせる、相手に同調する、というような傾向が窺われます。そうしますと、例えば、夫婦という組み合わせで考えますと、非主張的な人は、相手も非主張的な人を選ぶということもあります。一方で、どちらかというと攻撃的な人とくっついたり、その攻撃的な人に依存したり、あるいは服従せざるをえない状況になったり、というようなことがしばしば見られます。非主張的な親の下で、子どもがどんなふうにコミュニケーションをある種、取り入れていくかということ、子ども自身も非主張的になっていく可能性もありますし、逆に子どもの方が非常に攻撃的になっていくこともあります。要するに、親があまり子どもに対して適切なコントロールもできなくなってしまうので、

子どもの方がむしろ攻撃的になるというようなこともあり得ます。

一方で2番目、「攻撃的な自己表現」というものもあります。これは先程の「非主張的な自己表現」とは、むしろ正反対とも言えるかもしれません。自分のことは優先する。相手の事を考慮しなかったり、踏みにじったりするような自己表現です。I'm OK, You're not OK.という感じですね。相手を支配し、相手を自分の思う通り動かそうとか、相手に勝とうとするような態度や行動です。非常にわかりやすいのは、例えば、大声で怒鳴るとか暴力を振るう、というのは典型的な攻撃的自己表現です。そういったことに限らず、嫌みを言うとか皮肉を言う、揚げ足を取る、相手の発言を無視する、巧妙に自分の欲求を相手に押し付ける、といったことも含まれます。攻撃的な自己表現をしている人は、本人はあまり問題を感じてないことが多いかと思います。むしろ本人は、「自分は自己主張をしている」という風にして、合理化していることがよくあるかと思います。実はこの攻撃的自己表現しがちな人というのは、ある意味で、自他の違いを恐れています。自分と相手が違うということが、なかなか受け入れられません。なので、例えば自分とは違う意見を相手が言ってきたりすると、何とかそれをねじ伏せようとか、コントロールしよう、支配しようとして、攻撃的になっていると考えられます。親が攻撃的な傾向が強いと、子どものほうはどうなる可能性があるかという、子どももその親を取り入れて攻撃的になる場合もあれば、その親の攻撃的な自己表現に非常に怯えてしまって、子どもの方が非主張的になる、自尊心も低下するというようなことにもなりかねないと思います。

では3つ目です。アサーショントレーニングの中で1番大事だと考えられているのが、アサーティブな自己表現ということです。アサーティブというのは、自分のことも大切にします。相手のことも大切にしようという、I'm OK, You're OK.ということを目指したい、ということですね。もちろん言うのは簡単です。実際にこれをやろうとすると、そんなに簡単でないというのは想像できるかと思います。自分の気持ちや考えあるいは欲求などを正直に率直に述べる、アイメッセージで述べる。「私はこう思う」とか、「私はこんな風を感じている」とか、「私はあなたのこういうところに困っている」、とかそういったことを、「私は」ということをきちんと主語にしているということですね。一方で、相手の気持ちや考えにも耳を傾けます。「リスニング」です。耳を傾け、尊重しようとする、そういう言動だということです。私はこういう風に思う。あなたはどうかの？とか、あなた自身の気持ちはどうかの？とか、ちゃんと理解しようとする、ということです。ですので、自分の言いたいことはちゃんと言うだけではなくて、相手が何を言いたいのか、相手のことを理解しようと思って耳を傾けますから、話し合いになります。当然その話し合いは、ある意味でめんどくさいです。むしろ、一方的に押し付けたり、逆に言いたいことを言わないで我慢していたりする方が短くて済む。

アサーティブに話し合った方が、面倒臭い。時間はかかるかもしれませんが、それでも、できればお互いに満足いく結論になるべく近づきたいと考えます。こうしたアサーティブな自己表現というのは、自他の違い、自分と相手の違いを、当然のこととして受け入れる、ということが第一になります。人は一人ひとり違う。血のつながっている親子であれ、愛し合っている結婚した夫婦であれ、一人一人違うと。だから考えることも感じることも違う。違って当然だということが出発点です。違うからこそ、理解して歩み寄らないとやっていけないよね、とそんな感じです。親密な夫婦であっても、考え方や価値観は決して同じではない。もちろん同じ部分、似た部分はあるかもしれませんが。これはアメリカのカップ

ルを対象にした研究で明らかになっていることですが、長期間にわたって上手くやっている夫婦と、あまり長期間続かず、短い期間で関係が破綻したり、慢性的に葛藤状態にある夫婦を比較したりすると何が違うか。実は、夫婦が直面する課題や問題には違いは無いです。つまり、どこの夫婦でも、例えば、子育てをどう分担するか、家事の分担とか、あるいはお金の分担、実家との付き合い問題、色々と問題になってくる事は実は、ほぼ同じです。ところが何が違うかっていうと、「どういう風にちゃんと話し合いを行っているか」ということなのです。アサーティブに、ちゃんとお互いに互いのことを大事にしながら話し合える夫婦と、そうでない夫婦というのは、結果がまるで異なってくるということがわかっています。それで親がそのようにして自他の違いを認められ、きちんと自分は自分、相手は相手、というようなことを尊重できれば、当然子どももそれを取り入れてアサーティブになれる可能性は高くなるのかと思います。最近の傾向として、こういうことがあるかなと思うのですが、もしかしたら攻撃的な親が増えているのかな、という感じです。実はこれは、親に限らずというところがあります。アサーショントレーニングが日本に導入されたのが、1981年ぐらい。もう35年ぐらい前の話です。当時のアサーショントレーニングの主なテーマは、「非主張的な人がいかにアサーティブになるか」でした。つまり自分の言いたい事をちゃんとと言えない人が、いかにしてちゃんと自分を大切に、ちゃんと自分の言いたいことを言い、なおかつ相手の話を聴けるか、ということが導入当時の多くの日本人にとってのテーマでした。しかし最近では、「攻撃的な人がいかにアサーティブになるか」というテーマを抱えた人が増えている。もしかしたら、日本人全体が攻撃的な面が少し出ているのかもしれない。その攻撃的な傾向がちょっと出てきているという親の背後に何かあるのかということ、様々な不安だったり、子育てに対する責任感だったり、多忙であるということ、疲れているとか、あるいは孤立している、というような、個人の中の問題ももちろんあるし、関係の問題やあるいは社会的な状況の問題も様々あってこういったことが起こっていると思います。それから、どんなふうに自己表現するかというのは、どんなふうにものを考えるか、ということにも影響を受けますので、ある種の「間違っただけの思い込み」みたいなものもあるかもしれません。これは程度によりますし、実際にどうしているかということにもよるので、必ずしもこういう風に思っているから、とって攻撃的に直接的につながると言い切れるものではないのですが、例えば、子どもは親の言うことを聞くべきっていう気持ちが非常に強いとか、子どもには何を言っても良い、というようなことですね。これは夫婦でもよくあります。夫婦だったら言いたい事は何でも言うべきだと思っていて、ガンガン相手を傷つけるというような、そういったコミュニケーションもよくあります。そういったある種のちょっと勘違いが非常にあるかもしれません。

それから、社会全体が自己愛的、という面もあるのかもしれない。自分のことをまず考える、あんまり周りの事は考えない、というように社会全体がそうなっているのかもしれない。

一方で、少しこれは家族療法的な視点にもなり、また最後の方でも触れますが、親が子どもにどう関わるかということ、実は親が「どう育ってきたのか」ということと無縁ではありません。親自身が育ってくる中で、あまり自分自身の親から、アサーティブなコミュニケーションというものを学ぶ機会がなかったのかもしれない、あるいは親だけではなく周りの大人からそういうものを学ばなかったのかもしれない、というようなことも考えられるかと思えます。

では次に、家族療法から見た両親夫婦の関係と子どもということについて、いくつかお話をしたいと

と思いますが、家族療法では両親の夫婦関係と子どもについて、色んな角度から検討されております。一番有名なのは、「三角関係」という概念です。これは、慢性的な葛藤や強い不安や緊張状態が夫婦関係に見られる時に、その夫婦のどちらか一方が子どもを巻き込むことによって夫婦関係の問題が水面下に隠れるというようなことです。典型的には、お母さんと子どもが密着してお父さんが疎遠になる、または、はじき出されるというのです。表面的には問題がなくなるのですが、実はこの巻き込まれた子どもが後々不登校とか様々な心身の問題が現れてくる可能性があります。家族療法的な視点からすると、子どもの問題ということに関して何かやろうと思えば、できれば両親も呼びたいというような発想になってきます。実はこの三角関係というのは、その家族の中で生じるだけではなく、援助者も巻き込まれて三角関係の一端を担うこともあります。例えばお母さんのカウンセリングをしている時に、お母さんが子どものことで困っていて、お母さんがカウンセリングを受けます。お母さんがそのお父さんに関するいろいろ不満とか愚痴とか悪口とかをいうと、援助している側が、会ったこともないお父さんに対して、ネガティブな感情がどんどん出てくる、ということがよくあるのです。お母さんと援助者は、非常にある意味心理的な距離が近くなる。そこからお父さんがどんどんはじかれるとか、あるいはお父さんに対しての否定的な感情がどんどん強まってくることも起こりえます。

それから、迂回連合という見方もあります。まわり道した連合ということ。これは、夫婦間の葛藤を否認して子どもを批判することで、夫婦が連合しているというようなことです。実際には夫婦間には根深い問題や葛藤があるにも関わらず、それをお互いに認めようとしなくて、見ようとしなくて、否認して、夫婦そろって子どもを批判することで表面的な絆を維持する、というようなものです。子どもの問題として出てくるのは、非行というような反社会的な問題であるとか、虐待の問題ですね。こういった問題があると親は、「困っている」ということを一応言います。何とかしてこの子を治して欲しいとかですね、どうなるか心配だ、とかいうのです。だからといって自分たちが何か変わらなきゃいけないとか、変わろうっていうのはなかなか出てこない、ということがあります。子どもが悪者にされていることで何とか絆を保つみたいなの、ちょっとこれ複雑ですので、なかなかここに入っていったらどうにかするっていうのはそんなに簡単ではないかと思えます。

さらに「引き裂かれた忠誠心」という考え方もあります。これは葛藤状態にある夫婦が子どもを自分の味方につけようとしたり、子どもがパートナーと関わることを拒否したりするということですね。例えば、離婚した親が、子どもが元のパートナーと会うということを拒むとか、再婚した継母あるいは継父が、子どもが別れた実の親と会うことを拒む、というようなことがよく起こります。そうすると、子どもは非常に困るわけですね。親にとっては、パートナーは悪いパートナーだったかもしれないわけですが、子どもにとっては、良い親だった、あるいは良い父親であったり、良い母親だったり、ということも充分あり得ますので、そこを否定されてしまう。それは子どもにとって非常にしんどいことですので、親の顔色を常に窺わなきゃいけないようになったり、親の夫婦関係の問題に責任を感じるということも起こってきます。自分が良くないから、両親はこんな風に仲が悪いのだ、と考えてしまうこともあります。

ちなみに、学部の3年生対象に、家族心理学の授業をしています。心理学科の学生ですのでいろいろ悩み、家族の問題を感じている学生が少なくありません。「親の夫婦関係に、子どもには一切責任は無い」

という話をしました。受講者は150人います。コメントペーパーの中に、「その言葉を聞いてほっとした」と書いてきた学生が、20人いました。1割以上の学生が自分の両親の夫婦関係に責任を感じ続けているってことなのですね。子どもは感じていても表現できない、非常に苦しい問題だと思います。

そして、「親役割代行」です。家族の中で子どもが親に対して、あるいは他の同胞に対して、あたかも親がするような養育的な役割を取るような状況です。物理的あるいは情緒的に親の面倒を見て、夫婦関係に悩む親を心理的に支えようとする。その存在によって、親のストレスが拡散されるのですが、子どもが結果的に自分自身の成長を犠牲にすることになります。これ本当に、幼児でもこういう役割をとることがあります。親に対してカウンセラーのように、受容的共感的な子どもってのが時にいます。とてもしっかりしています。このしっかりしているというのがなかなか困りもので、実は、学校の中ではとても教師ウケが良いってことがあります。学校の中でとてもしっかりしているので、先生にとって頼りになる子どもになったりしますので、そうするとクラスの中にちょっと手のかかる子どもがいると、あの子の面倒を見てね、みたいに言われて、非常に頼られているみたいなこともあったりします。頼られているということは、子どもにとっては嬉しい反面、実は時に重荷にもなるので、ちょっとここは気をつけたいなというところですね。

いろいろお話ししてきました。こういうお話をしてくると、要するに親が悪いのか、という感じに聞こえるかもしれません。家族療法にはいろんな考え方があります。子どものことを見るにしても、親のさらに上の世代まで見ながら子どものことを理解するという考え方があります。これを「多世代家族療法」といいます。この「多世代家族療法」の重要な概念の1つに、「破壊的権利付与」という概念があります。これはどういうことかと言いますと、「源家族」、つまり生まれ育った家族ですね、例えば親自身が自分自身の生まれ育った家族で、その親から温かい肯定的な関わりを受けることができなかった場合、よく見られるのは、親の精神疾患だったり、虐待だったり、離別や死別、あるいはトラウマといったことがあります。こういった経験をした人の全てではありませんが、経験した人の中に、子どもや配偶者の欲求や感情や不安や考え方などに対する感受性や関心や配慮の欠如が見られ、自分の言動が、子どもや配偶者にどのように受け取られるか、どのような影響を及ぼすか、あるいは傷つけているかについて、全く無自覚という問題が出てきます。それゆえに、現在の子育ての問題とか夫婦関係の問題に影響を及ぼしている、ある意味で非常に見えにくい過去。過去が現在に影響を与えているのですが、これは家族療法では原因とは考えない。あくまでも要因と考えています。そういう意味で言うと、当たり前のことですが、親もかつては子どもであった。今子どもと親の関係を見てみると、もちろん親は大人ですけども、その親もかつては子どもだったのです。場合によっては非常に傷ついた体験をとっても持っている、持ち続けている人かもしれない、というような視点が必要になる。

では、家族療法ではこういった葛藤状態にある夫婦をどう理解するかということ、少しセラピーのことに即してお話をしますが、葛藤状態にある夫婦と関わっていると、援助する側の感情体験もなかなか大変です。不安を感じたり、あるいは目の前で夫婦喧嘩をやられるとこちらが傷ついたり、無力感を感じたり、あるいは場合によっては怒りを感じることもあります。子どものことなんか全く考えなくてバシバシ喧嘩をしている夫婦と面接していると、こっちが頭にくるみたいなことも起こります。それから、理想の夫婦という考えはちょっと落とし穴があります。よく夫婦ってというのは考え方や価値観は

同じであるべきというふうと言われる場合があるかと思いますが、しかし、そんなに一致するっていうことは、現実的にはないだろうと思いますし、うまくいっている夫婦っていうのは、微妙にずれながらそれを調節しているという感じが、私にはあります。それから、夫婦の間に葛藤が見られると、その葛藤ばかりにわれわれは目を奪われる危険性があります。実はその葛藤の根底には、子どもへの愛情とか配偶者への期待というものが込められていることがあります。何か子育てに関して、例えば、子どもの進学をどうするかとか、夫婦で意見が食い違っている時に、実は子どものことを思っているからこそ、そういう食い違いが起こっていることがあります。子どもへの愛情もこちらは気づいていないと、ネガティブなものばかりこちらが捨てていくと、どんどん親の悪い面ばかり見えてくることになります。

そして、表に出ている不満あるいは怒りに惑わされない、ということも大事だと思います。これは、アサーションの考え方も入っています。つまり、怒りは、実は根底には不安とか傷つきとか無力感とか悲しみという、弱い感情があります。怒りをそのままどうにかしようとするとなかなかうまくいかない。むしろその根底にある弱い感情をどう扱うか、と考えます。あとは、援助者のバイアスの問題、父親はこうあるべき、とか母親はこうあるべき、とっていると目の前にいるその人らしさ、というものをなかなか理解できないことになるかと思いますが。

最後に、どう関わるかということですが、これはさきほど、三角関係のお話をしましたが、カップルの問題、カップルセラピーをしている時は、夫は正しいかとか妻は正しいか、というような考え方は基本的にはしません。どっちもどっちみたいな感じで見っていきます。どっちが正しいかっていうことにこちらが巻き込まれると、実はセラピストが離婚を促進することがあるっていうことが言われています。援助しているつもりが離婚を促進してしまう。で、基本的にはそれぞれの言い分や気持ちや考えを尊重するという、そして、些細な努力を認めて労う。うまくいってない、いかなかったこと、その結果に囚われるのではなく、そこに至るまでの「ほんの小さな努力」をどう見つけられるか、ということ。あとは、2人の中でどんなコミュニケーションが起こっているか、そのパターンや悪循環を伝えたりすることもありますし、子どもの傷つきや不安を代弁する、ということもあります。例えば、目の前で夫婦喧嘩している夫婦見ていると、こっちは当然いろんな感情が湧いてきますが、こういう風にお家でやっていると、多分、お子さんはこんなことを感じていると思う、とか、こんな風に不安を感じるかもしれない、などということをかなりストレートに伝えることもあります。

最後ですが、子どもの問題の背景に夫婦の問題があるのは確かにそうで、今日もそういう話をたくさんしました。子どもの問題でご両親がカウンセリングに来られた場合は、ご夫婦の問題を扱うという感覚は、あまり私にはありません。親としてどう協力できるか、というところをメインにします。ですので、その時は「お父さん」「お母さん」という呼び方をしますが、「ご主人」「奥様」というような呼び方はしません。親であるってことをメインにして、でも間接的には夫婦の問題を見ながら、親であることを扱うというようなそんな感じになります。

いろんな雑多なことを早口でお話ししましたので、ちょっと頭の整理が追いつかない部分もあるかと思いますが、後でまた、何か質問でも出していただければと思います。どうもありがとうございました。

松下：野末先生、ありがとうございました。もう少しお話を伺いたかったところです。後のディスカッ

ションのところでまたお話し聞かせていただければと思います。

それでは続きまして、内田利広先生に、「学校臨床における家族への支援：親の期待をめぐって」というタイトルでお話いただきます。簡単ではございますが、内田先生のご紹介をさせていただきます。内田先生は九州大学大学院教育学研究科のご出身で、九州大学教育学部助手として心理教育相談室に勤められた後、現在のご所属である、京都教育大学教育学科の講師として着任され、同助教授と准教授を経て、現在は教授を務めておられ、臨床心理士養成指定大学院における教育訓練、教育にも携わっておられます。またその間、長年にわたって、京都市内の中学校にてスクールカウンセラーとして現場の臨床実践にも携わっておられまして、京都府臨床心理士スクールカウンセラー担当理事なども歴任されておられます。また、ご専門は教育臨床、家族心理学、フォーカシングなど、広い視野と豊富な実践経験をもとに家族関係や学校臨床に関して数多くのご著書があります。最近の主なご著書として、『期待とあきらめの心理：親と子の関係をめぐる教育臨床』などを出版されており、大変ご活躍の先生であります。それでは内田先生よろしくお願いたします。

<シンポジスト2> 内田利広（京都教育大学教授）

「学校臨床における家族への支援—親の期待をめぐって」

紹介いただきました内田です、よろしくお願い致します。

今紹介いただいたように、教育大にいますので、日ごろは教員養成ということで学生の指導もしていますし、現職の先生も大学院生ということで、来られたりもしますし、一方で先程ご紹介頂いたとおり、スクールカウンセラーを長くやっております、いわゆる不登校だったりいじめであったり、発達障害の問題等ですね、やっぱり学校臨床を中心にしてやってきたというところがあります。一方で私自身も、家族に関心を持ってしまして、卒業論文、修士論文において、家族関係についてずっと扱ってきたということで、そういう意味では今日のタイトルにありますように、学校臨床における家族への支援ということで、親の期待ということに関心を持っていますので、その辺のことを中心にお話をさせていただいたらと思っております。

それで親の期待ということについていろいろと私はずっと考えてきました。基本的には親はこうあって欲しいなと子どもに願うわけですね。それに対して、子どもは子どもの目標としてそれに向かっていく、あるいは子どもを導いていくように、親が子どもに期待するのは当然だろうと思われまます。期待する事は、子どもにとってみると頑張ろうと、あるいは意欲、エネルギーとなっているでしょう。ただ私自身がいろんな子ども、あるいは保護者に面接する中で、その期待するということが子どもにとって、どういう影響を及ぼしているのか、と考えるてきました。一般には過剰に期待してしまうということが、時には押し付け、子どもをコントロールしていかうとすることがありますね。親は願いとして子どもに期待する。子どもは必ずしも期待に応えられないということがあります。その期待に応えられない時に、どうするか。特に親はどう対応するのか。子どもも非常にそういう時って苦しいですね、まあその辺の問題ですね。あと、私が親の期待について話していると、いや、でも期待しない親もいると言われるこ

ともあります。確かにそういう期待をしない親というのはどうだろう。一方で少し考えてみられたらいいかなと思います。

まず期待について、全体的なお話をします。子どもは、やはり親からの承認を求めていますね。親の期待に応えることで、認められ、褒められることを欲する。これは人間にとって基本的なことです。やはり、褒めることは学校現場でもそうですけども、人間誰しもが認められたいと思っていますよね。この期待の内容とか在り方についてはですね、小学校の高学年から中学校にかけてですね、いわゆる社会志向的な期待から個人志向的な期待へと変化するとされています。社会志向的な期待というのは、いわゆる社会性ですね。特に小さい頃、幼稚園とか小学校低学年では、みんなと仲良くしてほしい、元気に過ごしてほしい、優しい子になってほしいと、親は願いますね。そういう、いわゆる社会的なものに対する期待を、親は抱いています。高学年になってくると、やはり個人の、かけっこすれば1等賞になってほしい、漢字のテストで満点取れたらいいな、とだんだん個人の学業や進路というものへと変化していく。これは日本社会の受験の影響があるので、ある種やむを得ないところかなと思います。そしてさらに親の期待は、無意識の親のこだわりや個人的願望を含みます。この辺は今日少しお話してきたらいいと思います。親は、期待していきます。特に思春期、小学生高学年から中学生にかけて、いわゆる自立の時に、親は期待して、親の期待に応えることは非常に大切です。一方で、子どもは自分の意思、思いがあります。その子どもの主体性、それを、押し殺していくことが、子どもには非常に葛藤を生じる可能性があるでしょう。この辺が親の期待との関わり方、問題になると思います。心理臨床において、親の期待のあり方では諦めということも、一方で言われています。面接において、親が一生懸命、期待している。期待に沿ってもらえないし、期待してもなかなか難しい時に、諦める。その諦めることが、何か面接において転換点を迎えることがあり得ると思います。私自身は諦めについては肯定的な意味で捉えているというところもあります。ですから親の期待のあり方という視点で、子どもの心を見ることで、思春期の親子関係やその解決の方向性が見えてくるだろう。少し具体事例で考えてみます。以前に私が経験したケースです。子どもがいわゆる不登校、学校に行かなくなった。親としては何とか学校に行ってほしいし、勉強も遅れる心配がある。そうして親は、子どもは自分の思い通りになるという思い込みがある。学校に行かなくても、家で宿題して欲しいとか、プリントをしてほしい、塾に行く。親として非常に強く操作的期待が働いている、ということも親としてはなかなか自覚できないことですね。最初の時に、そういう風に期待してもちょっと難しいのではないかと諦めのようなことを少し伝えていきます。なかなかそれは保護者には伝わらないし、逆効果になることもあると思います。最初の頃こういう親の期待に対して子どもは反射的に、その子は「はい」と応える。親が言ったから、そうしますと、本当にそういうことが身に付いてきたところがあった。期待への気遣いというようなことも見られます。私は初期の頃は親が持っている操作的側面ですね、コントロールしていくような側面がある、ということで操作的な期待と呼んでいるところがあります。次第に面接を続けていると、親も自分が期待をしているということに、少し目を向け出します。それは、例えば「私が子どもにはこうなって欲しい」、と自分の期待を示すときに、主語をつけることが起こります。最初はその期待、思いが、子どもの思いなのか、親の思いなのかわからない。区別がつかないところがあります。次第にその親の思い、期待を聞いていく中で、少し分かれてくる。そこに手をつける、ということですね。これは先ほどの野末先生のお

話にあったアイ・メッセージということにもつながると思います。私はこうして欲しい、私は子どもにこれを期待しているということ。そのことに少し気づいてくる。そう言いながら、さらに深い別のレベルですね、わかりました、もう学校に行けなくてもいいですけどただ家でちゃんと起きて、勉強さえしてくれたらいいとか、やっぱり親としては何か子どもを動かしていこうという気持ちが非常に強いのではないかと思います。その時に子どもの反応としては、期待への気遣いがあるとともによつぱりちよつとずつ反発するというこゝとですね、お母さんは何とか学校に行かせようと思って、あれこれ一生懸命動く。結果的に子どもは全く学校に行く気配を見せないということが起こってくるのです。これを私は期待の行き詰まりとよんでいます。親がどんな期待をしても結局思い通りにならないと行き詰まっていく。そういう中で、お母さんは苦しい状況に陥ります。保護者を支えるものが一方で非常に大切になってくると思います。家ではお母さんが一生懸命何とかしています。動かない子どもに対して苛立ってきて、最終的にもう自分でもよくわからなくなって混乱してしまう。そういう時に、家ですね、みんなマラソンをしようという事で、家族はマラソンを始める。夜になって走りに行こうかというようなことがちよつと起つたり、あるいはそこでお父さんが少し出てきて、子どもと将棋を指すというようなことがあつたりして、お母さんもそれならいいか、とすぐに何とかさせようという動きが少し収まっていくなということがありました。面接後半の方になってくると、お母さんいろいろ言ってももう無駄かなということでも話が中立的でそつけない感じになっていくんです。操作やコントロールしていこうということが少し弱まって、子どもの言葉に従うようになる。もっと言うと、子どもに任せられるというか、子どもが勉強しようと思つたらしたらいい、というように、少し見守るような態度であつたり、あるいは子どもの姿をありのままに受け止めていくようなことができるようになっていくんじゃないかなということですね。子どものほうも、そういうふうに関が操作的な部分が弱まってくるとですね、期待されても決めるのは自分であるという形ですね、意思表示をする、それこそ自分の自己表明をできるようになってくる。つまり、一つは拒絶するってことですね。親に、勉強しなくてもいいの？と言われても、もういいのだ、今俺したくないと言えるようになっていくということですね。そしてその子の場合、結局中学校はなかなか行けなかった。でも自分で高校は受ける、試験に行くということで、受験を決めて自分で取り組んでいくようになる。お母さんへの反発も逆に減っていきますね。というようなことが起こってきています。今これを私は『あきらめ』とよんでいます。諦めの段階においては親としてはもっと、子どもへの純粋な、というちよつと難しいですけども、愛情としての思いというものが、出てくる回というようなことを考えています。そういう面接の流れを少し考えてみました。その子どもへの思いというのは、子どもの健康や成長を願う親が本当に一般的に共通して持つ期待であつて、子どもを受け入れるのに何らかの条件付けをすることなく、ありのままの姿を受け入れていこうとする思い、ということで、これは、当然子どもが小さい頃は生まれてきてくれて本当にありがとう、ということですね、元気に育って欲しいなと願っている。初期はそうです。そこに親はどんどんいろんなものを重ねてしまつて、いろんな期待を重ねてしまつているのではないかな。その期待のあり方に少し目を向けてみるということが、子どもとの関係を見直す一つのきっかけになるのではないかなということ、これは面接のプロセスとしてですね、操作的な期待というものがある程度、行き詰まってその行き詰まりの段階においては親の期待のあり方が少し変わつていって、少し期待が純化されていくということがあるん

ではないか。そして最終的に諦めということで期待を諦めることで子どもへの思いというものが表に出てきて、ありのままの姿を認めるということが可能になるのではないかとというようなことを考えてみました。次に諦めることについて、実際の保護者との面接でも、不登校という現実に向き合うという非常に辛いことですね、保護者としても自分の子どもが学校に行けないで家にいるという現実に向き合うというのは非常に辛い作業です。どうして学校に行けないのだろうか、どうしてもっと周りの子と楽しく遊べないのだろうかということですね。親としては何としても学校にいかせたいと思うし、あれこれ手を尽くしていくわけです。ただそれに対して子どもは全く反応しなくて、なかなか親の思い通りにはならないということですね。なかなか思い通りにならない中で、親自身も行き詰まりながら、もう諦めましたというような発言が見られて、もう諦めましたという発言は何か親の中で変わっていく 1 つの転機として、子どもの成長を待つ心構えというものができてくるのではないかと思います。

実はこれは、心身障害児の母親の障害受容という過程とも少し重なって、ある論文の中でそういうことを紹介されています。親にしてみると他の子と同じように成長して行ってほしいと願う私、それは親の期待としてはそうです。そういう自分の子どもに対する発達というものが難しいという幻想が崩れると、現実への直面化が促されていく。そして本当の子どもなりの姿を見ながら子どもの発達や子どもの持つ価値の捉え方というのが変わっていくことがあるのではないかとということですね、そういう諦めに至るプロセスというのは実は何か新たな視点を獲得するプロセスなんではないかな、と思っています。したがって『あきらめ』とは、様々な親の思いを含んだ親の期待が明らかになること、『あきらめ』ってというのは、明らかにするという意味でも使われます。親のいろんな思いですね、先程の野末先生のお話でも親はいろんな歴史を背負ってきていることがありました。ですから親の期待の中には、やはり親自身が今まで受けてきた親との関係というものを含んだ様々なものが含まれていると思います。それを少し語ることで明らかになっていくと、そのことが期待通り操作できないというように変わっていくことになる。そして親子関係が変わっていく 1 つの転機になっていくと、考えられる。そういう意味で『あきらめ』は、明らかにすることであり、親の望んだ子どもへの期待というものを断念する、いわゆる諦める両方を含んでいる言葉として、理解できるだろうということです。そういう意味で親の期待というのはなかなか難しい。じゃあ期待するのは良くないのか、期待しないほうがいいのかと言われるとそれもまた違ってですね、子どもは期待に応じて認められ褒められて生きていくということですから、何も言わず関わろうとしないというのは、それは逆に放棄になってしまいますし、過剰な期待ということになると、それは先ほど言った操作的な期待ということになります。親の期待にはいろいろ含まれていて、子どもを追い込んでいくし身動きできない状況にしていく。これは難しいですけど、程よい期待が良いのではないかと。程よいってのは、じゃあどの程度なのかというあたりは、なかなか難しいところですね。そこで私が思っているのはやはり親が自分の期待を語るということが大事じゃないかということですね。だから親が子どもに願っていることを、言葉にして伝えてみること、つまりコミュニケーションを取ることですね。そして子どもにこうなって欲しいと、そしてその理由も含めて伝えていくということですね。話をしないで伝えようとする、親のことを子どもって察していく、先程からあるように空気を読んで、それに応えないといけなくなると、子どもをかえって苦しめてしまうことがある。実際にそれを言葉で伝えるということですね。そうすると言葉で伝えるとそれは子どもにとっては拒否ができる。俺

はそうは思っていないのだとか、したくないのだという形ですね。そういうように期待を拒否できるような、できれば提案というような形で伝える。そこに対して子どもは自分がこういうことに関しては関心がない、嫌だ、ということが語られるようになる。もう一つは先程言った、期待しても期待通りにいかない時があることがありますね。それは頑張ってもなかなか思い通り期待通りにならないことってというのは現実には多いですね。そういうなかなか頑張れない子とか緊張してしまう子とか、運動会の当日になって走れなくなってしまう子がいます。不安が高くなる。それはやはり一人一人の頑張りですね。大切なのは当然結果ではなくてそのプロセスですね。それまでの努力というものをきちっと評価して、やはりそれでもかけがえのない存在だと、期待に添ええなくても大丈夫ということを親が伝えてあげられるかだと思ふ。これはなかなか難しいところかなと思います。

それで、話が変わりますが、期待しない親はどういう親かと考えてみます……。最近よく学校の先生と話すときに出てくるのは、学校に行くのを親が望まないし、もう学校に行かそうともしない。いわゆる押し出しの弱い保護者、親が多いようです。やっぱり親は少し学校に行くようにということですね、促していく。本来は家庭の中で親と子が少し離れていって子どもを押し出すような斥力と言われるような動き、力が働くのかなと思うのですね。逆に学校に行くと、子どもと先生とか友達同士が引きあう引力が働いている。これはいわゆる学校魅力といわれることですね。学校に行くと楽しいなど感じる。そのところの力関係が非常に弱くなってきて、特に家庭から子どもを押し出す力というのが少し弱くなっている、というように言われているところがあります。押し出しの弱い保護者は、いろいろ考えられる(図1 文書末 19 ページ参照)。親子が磁石でいうと、斥力です。マイナス同士で近づくと力が働いてパンと離れていく磁力。親も子どももマイナスだとパンと離れていく。そういう磁力自体が弱くなっていると思います。つまり親のエネルギー自体が非常に弱くなっているというのではないかなということですね。そこにはいろんな要因があって、図1にいくつか挙げています。親自身の精神的な疾患とかトラウマってこともありますし、もう一つは、やはり異なる文化が家の中に入ってくる、ということについて、親としては少し抵抗があって、子どもが親から離れて外の世界を知るということは、いろいろな文化が家の中に入ってくる。そういうものに対する、抵抗感、あるいは社会的退行、親自身が社会の中でのつながりが切れていっていることもある。地域社会からも孤立していっているというようなところですね。もう一つは、やはり登校に対して押し出すということはですね、子どもが行きたくない時とかは、嫌だって事で、反発しますね。この子どもと向き合わないといけない、やはりそこで押し出ししようと思うと、その子と向き合うということが必要で、それを非常に避けてしまうということがある、ということですね。そういう中で実は、家庭の中で、今、親子の隠れた斥力ではなくて引力、親が子どもを引きつけて家から出さなくしているところがある。これは非常に難しいところです。どんどん、家の中に閉じこもっていくような側面があります。それが、やはり、やがては引きこもりとか、そういう世界にもつながっていく。その親子の何ていうか斥力、子どもがほどよく距離をとりながら、離れていく。そういう力の出しにくさがあると考えられます。あとこれは学校の話になる。一方で学校は子どもを惹きつける引力というものがある。そこもなかなか今難しくなってきた、親自身も学校に行くことを勧めないですし、先生との関係性をなかなかうまく尊重していけないというところがありますね。そういういったところをどうやって学校の中では見つけ出して、少しでも子どもとの結びつきを強めていくか、

あるいは家庭の斥力のなさ、それを阻害しているものをどう捉えていくかです。これは先程の親の期待も含めて、保護者自身のいろいろな思いが含まれています。わたし自身は、多くの先生方と今、接しています。やはり家庭の問題に対して先生方もどこまで関われるだろう、どこまで踏み込めるか。そういうことが、今、大きな問題になっていると思います。それで最近、私が妄想のように、次のようなことを考えています。学校というものを、少し変えていく時期に差し掛かっていると思います。そこで学校を、いくつかの部門に分けてですね、当然教育支援という形で教師が授業を教えるという部門もあります。やはり心理的な支援で子どもの心理的な支援の部分であったり保護者の心理的支援の部分はどうサポートするかというような部分、あるいは福祉の部分ですね(図2 文書末 19 ページ参照)。

スクールソーシャルワーカーが学校に入っていますね、福祉的な支援から、あるいは経済的な問題であったり、先ほどから出てきている DV の問題であったり、非常に保護者自身が多く困難を抱えている、そういうものに対しても支援していく部門が必要になってくると、当然医療であったり司法であったり問題も出てくると思います。こういったものが今後学校の中で連携しながら扱っていけるようなものを、もう1つのセンターとして作っていく。これを「学校」と呼べるかどうかということもちょっとわからないです。おそらく文科省は今学校の教員の比率を下げているとしてますね。教員以外の専門家を学校の中に入れていこうとしているので、おそらくこれから学校をもう少し子どもから家庭も含めてという、地域ということに広げていってですね、その地域スポーツクラブ等も含めています。スポーツも今地域で行われていますから、部活動もどうするか非常に問題になってますし、部活動の指導者を学校の中になんという話もありますので、そういった意味ではですね、もう少し学校と地域等がつながって、そこにいろんな専門家が入っていきながら、1つの新たな教育のセンターのようなものを作っていくことが、これからの家庭の状況を考えると必要になってくるんじゃないかなと思っています。以上で私の話を終わりたいと思います。どうもありがとうございます。

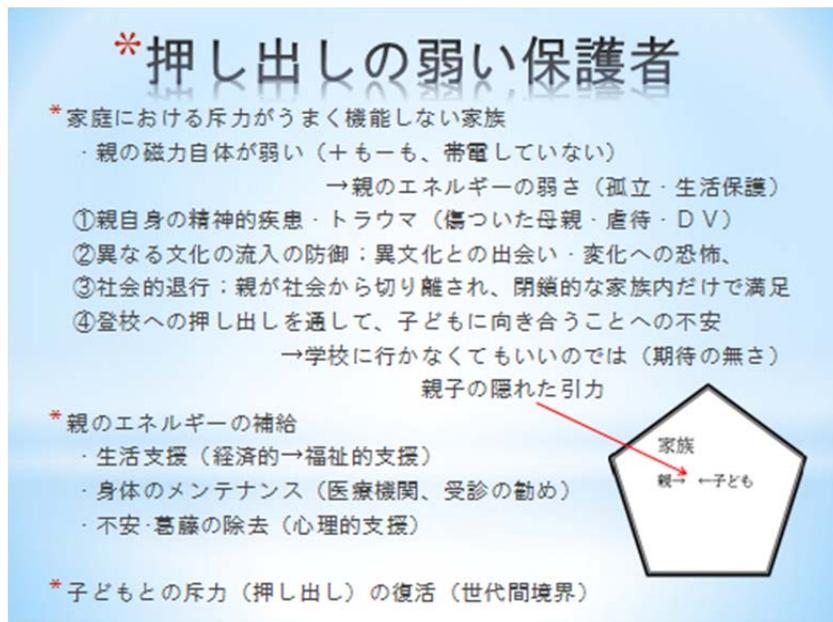


図 1

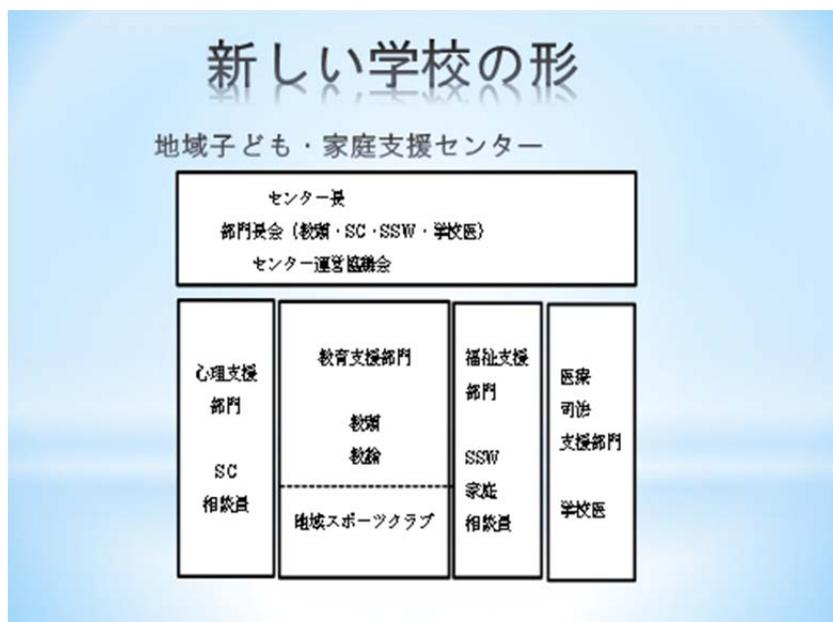


図 2

松下：内田先生、ありがとうございました。それでは、鳥井敬子先生に「学校現場での学校支援」というタイトルでお話しいただきます。簡単ではございますが、鳥井先生についてご紹介させていただきます。鳥井先生は京都女子大学のご出身で、京都市の中学校教諭などを経て様々な教育現場にて実践活動を重ねてこられ、現在は京都市教育委員会京都市教育相談カウンセリングセンターにてカウンセラーを勤めておられます。中学校の教諭として豊富な教育相談の経験をお持ちで、また子ども、家族、学校、教員をめぐる心理的問題についての、より良い理解と実践に関して、大変情熱を持って探究を続けてこられ、京都大学への内地留学のご経験もお持ちです。学校現場における子どもたちの問題や家族の問題を中心に、臨床実践に精力的に携わっておられ、特に子どもの問題の背景にある家族が抱える問題に、家族との信頼関係を築きながらアプローチしていくことに大変長けておられる先生かと思えます。それでは鳥井先生お願いいたします。

＜シンポジスト 3＞ 鳥井敬子（京都市教育相談総合センターカウンセリングセンター カウンセラー）
「学校現場での家族支援」

よろしくお願いいたします。私が所属しておりますカウンセリングセンターというのは、今ご紹介いただきましたように、教育委員会にございます施設になります。様々な施設が入っているのですが、またご興味ある方いらっしゃいましたら検索していただけたらと思います。わりと京都市で自慢の施設かなと思っております。現在私はカウンセリングセンターでカウンセラーとして勤務をしておりますが、今ご紹介いただきましたように、もともと中学校の教員です。今回、学校現場での実践の紹介をというご依頼を頂戴いたしまして、どうしようかなと思ったのです。教師として中学校に勤務していたときの保護者の方との関わりについて、事例を中心に話をさせていただこうと思っております。

学校現場では保護者の方にもご協力いただきながら、子どもたちの教育活動を行っていくわけですが、中には連携を取るにはどうすれば良いかと、教師も保護者も悩むことがございます。私も周りの教師に助けをもらいながら、保護者の方にも助けていただきながら、試行錯誤しながらやってまいりました。今回教師の立場からの関わり方の1つとして私の方法をお聞きいただけたらなと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

皆様に守秘義務についてのお願いがございます。今回事例がございますので、この会場以外でこの事例についてお話をなさるといことはございませんよう、お願いいたします。また個人が特定されないように一部事実を変えている所もございますので、似ているケースがお近くにあったとしても重ねることがございませんようにご配慮お願いいたします。よろしくお願いいたします。では始めさせていただきます。

まず教師と保護者との関わりについて、学校の中での一般的な流れを確認させていただきたいと思えます。カウンセリングでは対象が保護者となることがありますが、教師の対象は子どもになります。教師にとって保護者等家族への理解と支援というのは、あくまで子どものためという大前提があります。保護者は子どもを育むための教育活動のパートナーとしての存在で、保護者とは信頼関係、協同関係を

築くことを目指します。そして保護者との主な関わりは、子どもについて教えてもらう、保護者の思いを聞く、学校での様子を伝える、家庭での様子を聞く、子どもに対する理解や対応について相談をする、といったものになります。そしてこれらの関わり方からわかることとして、子どもや保護者の困りや不安など様々な思い、あと家族や友人などの関係、障害や病気など様々な家庭の状況等があるかと思えます。そして分かったことによつて、子どもや家族への理解が進み、子どもへのより適切な対応、家族に対しての必要な支援、必要な環境への働きかけを、考え行うことができます。ただし中学校ですと3年間、あるいは担当する1年間にできることという見通しのもと、卒業後は家族でやっていくことができるように、という前提でできることや必要なことを考えていくかと思えます。以上がおおまかな流れになりますが、この流れの中にはスムーズにいかないことがやはりありまして、その要因は、教師の初期対応のまずさや教師と保護者の思いのズレ、保護者からの無理難題など様々な問題があるかと思えます。今からお伝えする事例は要因が、私からすると、保護者からの無理難題、保護者からすると対応のまずさや思いのズレであったように思えます。この要因の捉え方にすら、ズレが生じる背景には、親御さんの生きづらさがあったかなと思えます。今回は、たくさんある私の試行錯誤や失敗の部分は伝わりにくいと思えますが、私がどのようなことを考え理解し、つながっていたかという部分を、お聞きいただけたらなと思えます。

(※以下は、事例に関する講演のため割愛し、一部を概要のみまとめています。)

これは先程の見立てや目標に合わせて親御さんに関わっていく際に、意識していた内容です。1つ目ですが母親的に応答的に対応することで安心感や信頼感を感じてもらおうと思いました。2つ目、保護者の話をまず聞く、思いを理解しようとする、ですが、教師は良い悪いといった価値観を持ちやすいのです。そういった価値観を持たずに親御さんの視点から見えている世界というものを理解しようとししました。3つ目、保護者の感情や思いを言語化して返す。4つ目、誰の感情なのか返す。5つ目、現実的な問題と気持ちを整理して返す。6つ目、学校側がゆずれないラインは明確に示す、そして動かさない。7つ目の解決方法の提案。続きになりますが、私が心がけていた点です。1つ目、「保護者のプライドは守る」。2つ目、アイメッセージを使う。3つ目、「保護者の素敵なところを伝える」。4つ目、保護者ができるところは頼る。5つ目、これは日常的なことですが一緒に笑うということを大切に。最後、少しずつ枠を作っていく。

同時に教職員との連携も非常に大切にしておりました。最後のスクールカウンセラーと相談。以上のようなことに配慮しながら関わっていたのですが、少しずつ関わりの中からわかってきたことがありました。このようにわかってきたことがあるお蔭で、それまでの親御さんの行動を理解することができただけでなく、ここから支援していくところがより明確に具体的になっていったかと思えます。同時に、いろんな変化も生まれました。私自身の中での感じ方の変化。関係性も変化し。親御さんにもAにも変化。ただ今思うと、年数の割には変化が大きすぎるなと思えます。何もなかったゼロの状態から生まれた変化と考えるには、無理があるかなと思えます。つまり親御さんは一見変化したように見えました。変化したのではなくて、実はもともと持っていた力を、私たちと信頼関係ができたことによつて、私たちにも見せるようになっただけのように感じます。そう思うとつながりがあるかどうか、関係を築くことができているかどうか、別の言い方をすると、その間に、安心感や安全感、信頼といった

ものがあるかどうか、ということが人のあり方そのものを左右させるのだなと思います。

最後に簡単にまとめとしまして、つながるための支援、私のイメージです。思いを含め、話を大切に聞くこと。理解しようとする事。そして見立て支援を考えていくこと。人との関わりなので、好きになること。これらはやはり、伝わると思います。そして信頼関係や適切な支援へつながっていき、トラブルになっても消えずに修復できるつながりへと結びついているかなと思います。

以上で私の話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

松下：鳥井先生、ありがとうございました。それでは、3名の先生方のお話を伺ったところで、この後、少し休憩を挟みたいと思います。そのあとで、全体での質疑応答と討論の時間としたいと思います。

—休憩—

全 体 討 論

松下：それでは全体討論を始めたいと思います。まずシンポジストの先生方にそれぞれの先生方のお話をお聞きになって、いろいろ少しディスカッションしたいな、という気持ちも芽生えてきておられたかなと思いますので、ご質問ご意見ご感想など一言ずつ頂戴できればというふうに思いますが、よろしいでしょうか。

野末：お二人の先生のお話を伺って、私の方から特に質問はありません。こんなところは視点としてあるいは大事にしているところとして、あるいは起こっているところといってもいいのかもしれませんが、似ているところがあるのかなと思いました。一つは、内田先生も自他の分化をいろいろな形でされていると思いました。誰の期待なのか、誰の気持ちなのか考えなかっていうことを、いろんな形で面接・面談の中で取り上げていかれて、多分それは親御さんは普段当たり前のこととしてあまり十分に認識していないことだと思います。改めて聞かれて考えてみると、ああこれは自分が考えて期待していたとか、自分のこんな気持ちなのかが分かってくる。そういう自分と子どものある種渾沌とした、一体化した未分化な状態から、自分はこうであり子どもはこうであるという分化の作業があるのだというのを一つ思いました。その中でアイメッセージをととても大事にされている。これは私の話の中でも触れさせていただきました。そんなプロセスが一つあるというのを感じました。自他の分化ということですね。もう一つは、自分自身の中での分化です。ここで言っている分化というのは differentiate っていう意味の、分けるという意味の分化です。自分自身の中でも、例えば怒りの根底に心配がある、「心配で怒っていたのですね」のような返しがある。わたしもちょっと怒りのことについては触れました。怒りをただ怒りとして認識してどうしようと思ってもとても難しいので、むしろその怒りの本質的な、下にある感情を扱うっていうのは、学校現場でもやはり同じように大事だと思いました。それからもう一つは、鳥井先

生の発表の中でとてもいろんな面で参考になるところがありました。ここはある意味で同じだなと思ったのは、スライドでいうと支援2のあたりでお話しされていたことです。親の素敵などころをきちんと伝えるっていうことが書かれていて、括弧して「本音」ということが書かれていました。実はここが一番難しくて大事なところという感じがしています。家族療法の技法の一つとして、リフレーミングがあります。リフレーミングとは、一般的にはマイナスに捉えられているものを枠組みを変えることでプラスの意味付けにするという技法です。これは単にマイナスのことをプラスに言っているだけではうまく伝わらないですね。あるいは、ただ褒めるだけではだめというのがあって、ちゃんとそういう風に感じて言えるっていうのがとても大事、共感して言えるっていうのが大事だ、と最近言われている。一見すると親の問題とか、困った親のようなところばかりが見えてしまう。実は、その親の中にはちょっとした、ここは子どものこと思っているとか、心配しているとか、努力しているとか、素敵と思えることをまずキャッチする。それが大事。それを思っているだけでは、足りない。きちんと伝えて共有できる。そして、それを本音で言えることが大事です。改めてわたしも学んだ気がします。

内田：わたしも二人の話を聴かせていただいているいろいろ連想は沸いていてですね、少しお聞きしたいなということもある。野末先生のお話で、アサーションをということで、アイメッセージということはわたしも同じように同感で、そこが同じように難しくて。やはりその自他の分化、親子でいうと親子の分化とか距離感ですね、ここが非常に難しいところがあって、そこをどういう風に見ていくかということかなと思う。少し先生に別の話を、お聞きしてみたいと思ったのは、最初の方のスライドで、今の家族関係をということで、夫の浮気というものもあるけれど最近妻の浮気という問題もあってきているという。今の世の中が少しずつ変わってきている。これはジェンダーの問題ということにもなってくるかもしれないです。あるいは昔は嫁・姑関係みたいなことがあって、女の人が男の人の家に入る、みたいなことがあった。先ほどあったみたいに今は奥さん、妻とお母さんとの結びつきが強くなってきているし、むしろ今は女性の方が親との、実母との結びつきが非常に強い中で、いわゆるマスオさんみたいな形で家族を作っていくところも多いかと思えます。ですからその辺が、社会が少し変わってきていて、女性の社会進出が強くなってきているということもあるんだろうなと思うんですけどね。僕は、むしろマスオさんのような日本の家族にはあっているだろうという気持ちも少しあります。つまり女性が親元で暮らしながら生活していくみたいなことですね。そのあたり先生の臨床実践とか現在の様子をいろいろ見ながらどんな風に考えておられるかなというのをお聞きしたいなというのが一つありました。鳥井先生の実践も本当に興味深く、わたしも学校でいろんな話聞いていますしスクールカウンセラーとしても行っていましたので、なかなかすごいな、というのが本音ですね。すごいな、というところでお聞きしたいのは、先ほど枠を作っていくとありました。その発想はなかなか学校では持ちにくいと思います。そういうのを少しずつ作って行って、保護者との関係を作っていくところ。そこを僕は見立てとか関わりというのをどんな風に、教師だけで、自分たちだけで作っていたのかっていう、最後スクールカウンセラーに相談してというところもあった。そういう関わりというのが学校の中で現実的にどのくらい可能なのか。つまり今回の先生の発表された事

例というのは保護者が来られたのでやむに已まれないところはある。それはかなり特殊なケースなのか、あるいはひょっとしたらそういうケースというのは他にもあって、学校ではそういうことはありうる、そうなのであれば、そういった取り組みというのはもう少し形として伝えていけるものなのかどうか。つまり先生の取り組みは非常にイレギュラーな形なのか、あるいは今後そういうものとして学校の中でありうるものなのか。もっと広げて言うと、教師としてそこまでするだろうか。僕は臨床家の人間として、スクールカウンセラーとかもっと心理的な部門みたいなところがあって取り組むのか、いややはりそこは学校として教師としてそこもやりますよ、と。ただこれは相当時間とエネルギーをかけているかなと思うのでね。そのあたりは、先生の実感としてはどうなのかなというあたりをお聞きしたいと思いました。

松下：どうでしょうか。今のご質問に対して、まず、お答えいただきましょうか。よろしいですか。

野末：マスオさんに限らないと思いますが（笑）。基本的にセラピーに来る人たちはうまくいかなくなつて来ているので、それを見ていて全体をどうのこうのは言いにくい感じはします。男女の在り方とか関係とかパワーの問題とかいろんな意味で変わっているというのは、それは統計的にも出ていますが、昔であれば男性の実家に女性が入ってというのがある種の典型だったとすれば、今はそういう家族もあればそうでない家族も増えてきているのは確かだと思いますし、女性の方が親と関係が近くて、夫の方がそれに合わせるということで、うまくいっている夫婦もたくさんあると思います。ただうまくいっている夫婦はあまりお会いする機会が普段ないので（笑）、現実的にはよくわからないということなのですが。ただ、話がそれてしまうかもしれないですが、昔は例えば伝統的性役割観というのがあって、男は仕事・女は家庭ということで長らく来たところに、それではよろしくない、男女平等であるべきだということが心理学の世界ではいろんな形で主張されるようになってきたと思います。しかし、それはそれぞれの夫婦に任せるべきだと私は思っていて、あまりごちゃごちゃ外から言うべきではないと思っています。つまりどういうことかということ、男は仕事・女は家庭でうまくいく夫婦はそれで良いし、平等に子育てを分担し、お互い仕事をやるのがその夫婦にとってベストであればそれがベスト、**House husband** がその夫婦にベストであればそれがベスト、と思っておりますので、そういう意味では何でもありと思っています。ただ、アサーションという観点からどういう家族や夫婦が一番大事なのかということ、やはりお互いが尊重できてお互いが納得できるということが大事なので、それはいろんな形があつていいと思っています。時々心理学の世界では昔はこうだったから今はこうあるべき、と言われることがあつて、ちょっと私は違うなという感じがしています。マスオさん状態で、うまくいっていればそれはOKと感じています。

鳥井：いくつか今ご質問いただきましたので、思いつく感じでお答えしたいと思います。もともと私は学生時代に心理学をかじっていたという経緯がございます。やはりそこがベースとなって、私の教師のスタイルができていた部分はあるかなと思います。その分、心理学をかじっていない教師に比べると、見立てとか、そのあたりのしやすさはあつたかなと思いますが、今カウンセリングセンターに勤務しておりますが、夜間にも、夏休みの期間でも、教職員対象のカウンセリング研修というものを行っております、数多くの先生方が何度も何度もお越しになる状況でございます。

今日もお越しだと思うのですが、このように研修に来られて、心理学的な視点を獲得するために頑張っている先生はとて多い。受け入れやすさが変わってきていると思います。そういう意味では、今後そういうことがもっともっと教師の中でも一般的になっていく可能性はあるかなと思っています。あと、京都市では全校配置でスクールカウンセラーが入っておりますし、全国的にもそのような動きがどんどん広がっていておりますので、校内にせめて一人いればそのような動きをやっていくことは可能かなと思っています。生徒指導の方でも、心理学の視点を入れたものが大分広まっています、融合された形で生徒指導の方も動いている、研修もそのようなものが提供されているということも多いので、そのような視点を得た教師というのは今後どんどん多くなっていくかなと思います。心理学を勉強していない先生が見立てをしていくときに役立つかなと思ったものに、「翻訳するね」という言葉を使った方法があるのですね。これはたまたま若い先生が教室を抜け出した生徒に対して「何してんの、どうした？」と声をかけたときに、「うざいねん、きしよいねん」と暴言を吐かれて終わって。せっかく声をかけたのにと残念がって戻ってきたということがあって、それに対してベテランの先生が、「それを訳すと」と少し冗談っぽく言ったことがありました。それはその生徒が、その声をかけてくれた若い先生のが大好きだったんですね。でも先生が忙しくて普段構ってもらえへんとすねていたのをご存知だったベテランの先生は若い先生に、「それ訳すと、先生大好きっていうことやで。もっと構ってってことやで」みたいなことを言わはったことがありまして。そこから発展して、私が紹介させていただいた親御さんのことを考えていく時にも、ちょっと冗談っぽくですが、中身は真剣です。「翻訳すると、それはな、きつとな、」みたいな感じで、言葉の奥にある気持ちとか行動の奥にある気持ちを探っていこうということを経験づいた形でやっていました。最初はなかなか表面的なことが多かった。それを繰り返していったり、その間にスクールカウンセラーさんに入ってもらってそれに対する意見をもらったり、アドバイスをもらったりと、新たな視点をもらう中で、どんどん本当に心理学の視点に近いような視点で見立てる、行動を見ていくことができるようになっていったと思います。工夫次第でそのようなことはできるかなと、実感しています。ただそれを教師としてどこまでやるかということですね。他の親御さんに対しても、このようなことをやってきたケースたくさんあります。やはりそのラインは学校で必要なところまで、というところになっています。本来はそこまでは教師の仕事ではないと思うのですね。やはり教師は教師なので、カウンセラーでもなければ心理学者でもありませんので、そこまでは違うかな、というイメージはあるのです。どこまでやるのか、という対応の基準を私もはっきりとした答えはわからないのです。よく言われるのが、教師というのはすごく熱心な人が多くて温かい人も多くてその分責任感も強くて、何でもかんでも必死にやっちゃって疲れ切ってしまうというパターンも多い。その背景には、万能的な役割を果たさなければとか、果たせるかも、みたいなそういう万能感を持っているような気がするのです。一方で限界というのはあるので、それぞれ。個人としての限界もあればチームとしての限界もあるので、その都度その都度現状と照らし合わせながら、自分たちの限界がどこなのか、何ができて何ができないのかについていうことをしっかり見つめていく、自覚するということは、そのラインを引くヒントにはなるかなと思います。無理なところを背伸びし

てやったところで、最後までやりきれなければ子どもたちも保護者も自分も結局傷つくことになるので、早いうちに専門家につなげるべきだとは思いますが。ただ学校では、専門家につなげたくてもつながらず子どもとか保護者が非常に多いので、そのあたりのフォローとしては、最近よく言われている「チーム学校」、専門家を交えて連携を取っていくというあたりになるのかなと思います。内田先生が最後におっしゃった「新しい学校の形」というのは、そのあたりを考えると、すごく理想的だなと思いつつながらお話を伺っておりました。あと、私のほうから質問してもよろしいですか。教師としては困った現状があると、これをどうしたら良いのかと考えてしまう。野末先生のお話からは3つのタイプがあるということで非主張のタイプ、攻撃的なタイプ、あるというお話でした。あとアサーティブなタイプと。学校で困る、最初の二つのものは、目立ちますが、なかなか対応に難しさがあります。そのあたり、対応のときにここ配慮すればいいよというのがもしあれば、教師にアドバイスいただけたらありがたいなという点の一つです。あと内田先生のお話でも「押し出しの弱い保護者」というお話がございました。こういう保護者に対してプレッシャーを与えたところで保護者がしんどくなってしまふな、とも思います。じゃあどうしたら良いのだろうかと思いが教師の中で浮かびます。そのあたり対応の際、何かこうしたらいいよとか教師にない視点を教えていただけたらありがたいなと思います。よろしくお願ひします。

野末：ありがとうございました。親が非主張的だったり攻撃的だったりという場合の対応って考えたらいいですかね。親への対応ってということですか、はい。攻撃的な親への対応っていう面では、おそらく基本的なことは鳥井先生の発表の中でほぼ全て入っていたという感じが私はしていますが。まず非主張的な方から言いますと、非主張的な親というのは基本的に自尊心が低くて自信がなく、場合によっては先生と自分との間でパワー格差みたいなものを感じているということもあると思いますので、基本は丁寧に聴くということだと思います。丁寧に聴くというのは単に黙って聴くということではなくて、親が言っていることをこまめに返したり、あるいは労ったりというようなことを本当に細やかにやっていくということだろうと思いますし、励ますというようなことも非常に大事だと思いますし、それから親をサポートしたいと思っているということをきちんと伝えるということかなと思います。攻撃的な親というのは、今日のご発表にあったような親というのは大変だなと思いました。基本的には、先ほど発表された中にほぼ全てエッセンスが入っているという感じがします。怒りの根底にある心配だとか、あるいは信頼できない感じだとか、先ほど私は弱い感情という表現をしました。表に出てきている強さにこちらが惑わされない。あるいはアサーションの言い方で言いますと、相手の怒りに感染しないという言い方をします。感染するというのは二つの仕方がありまして、どういう感染かという、一つは向こうが怒ってるからこっちも怒るという感染ですね。怒りに対して怒りで対応しちゃう、あるいは怒らされちゃうという感染の仕方です。もう一つは、怒りをぶつけられると全てこっちが悪いと思ってしまう感染の仕方です。アサーションでは、感情はその人自身のものであるという大前提があります。もちろんその感情は、人とかかわりの中から引き起こされたりすることもありますので、例えば親が怒っているときに、その親の怒りをこっちがどこかで引き出しちゃったということもあるかもしれません。しかし、それにしても怒っているのは親であり、その怒りの感情を抱えている

のは親なので、親自身が何とか対処するというのが基本です。ですが援助者という立場にあると、その相手の感情に対して働きかけることによって、何とかそれを緩和しないことには話が前に進みませんので、そういう意味で、先ほどご発表にあったような様々なこと、例えば心配して怒ったのですねと返す。これは実はなかなか簡単に言えないと思うのですが、そういうことをこまめに伝えることだと思います。あるいは事実と感情を分けるということもそうかと思います。あとこれはなかなか難しいですが、ときに有効なのは、怒りをぶつけられてくると、こっちがそれを収めたり、あるいはこっちが正当性を主張したくなったりということも起こってくると思いますが、あえてじっくり聴くということを丁寧にやることです。それから、これはどちらかというセラピーでのやり方に近いですが、この怒っている人、怒りをぶつける人が、何と言ったら、「そうです」、と頷いてくれるか。それをいくつか考えることですね。それは何を向こうが訴えてきているかによる。いろいろぶつけてきていること、文句を言ってきていることに対して、自分が何と言ったら、この人は「そうなんです」とか、要するに「イエス」と言えるのか。そのことを積み重ねていくと、通常そういう怒りはだんだん減り、抵抗感は小さくなっていきます。問題、文脈に応じて、「イエス」と言えることをこちらが考えることだと思います。それは先ほど言った「心配して怒ったんですね」というのもその一つだと思います。ついつい怒りに対してこっちが強気に出てしまうみたいなことをやってしまうと、火に油を注ぐことになるかなと思います。こんなことで答えになっているでしょうか。

内田：はい、ありがとうございます。私が言っていた保護者の押し出しの弱さというところで、少し説明が十分できなかつたところで、ありがとうございます。先ほど言ったみたいに、そういう親ってエネルギーが低下しているというところはあるかと思うので、基本的には親御さんのエネルギーを補給していくということですね。心理学的に言えばエンパワーするということになる。現実的にはスライドにも書いていた。生活そのものは非常に疲弊しています。特に経済的にもしんどいというような状況であれば、やはりそういう福祉的な支援というようなところも考えていく必要はあるかと思えますし、当然親の身体的な調子が悪ければ医療機関でもありますし、あるいは親自身の何か心理的な不安とか葛藤があるのであれば、そこを支えて、いわゆるカウンセリングの方ですね、スクールカウンセラー等のところへ繋いでいくということですね。先ほど鳥井先生の取り組みでもあった、まずはしっかり聞いて受け止めて一緒に考えていくっていう。そういう中で親のエネルギーという力は少しずつ回復してくるというか。先ほど鳥井先生がおっしゃったように、それは変化というよりは、もともとあったものだろうと、僕も共感しました。親自身はそういう力、エネルギーは持っている部分はある。だけど、なかなかうまくそれが出せない。あるいは妨げられている感じがする。そのあたりをいかにこちらが見極めて、関わっていくか。そのことで少し親のエネルギーが補給される。送り出す、押し出すようなことが可能になると思えます。それともう一つ私がよく聞く話ではですね、子どもとの斥力、というか押し出しがですね、なかなか見えないときになんとか非常に近い感じになってですね、いわゆる世代間境界みたいなものなかなかうまく引けていないようなところがあってですね。これはたまに先生たちの話を聴くと、今は中学生でも学校に行かなくて家に引きこもっていて、家での生活を聞くと、親

と一緒に風呂に入っている。これがどうなのか。当然男の子がお母さんと入り、女の子がお父さんと一緒に入っているのですね。これはどうなのだろう、といつも僕は思いながら話を聞いています。家では普通ですよ、なぜか知らないけど、中学生になってもね。「子どもは、それ何も言わないのですか」、「女の子嫌がってないですか」と聞いても、「いやいや、うちはこうです。お父ちゃんはいつも子どもと小さい頃から入っているし、今でも一緒に入れと言います」とおっしゃいます。やはりそういうものに対して違和感というか、ちょっとこれどうなのだろう、とかです。親との間で世代の境界線をどう引いていくとか、ちょっと違いがあるとかです。何かそこに距離ができるのを、少しずつ伝えていって、そうする中で親も「それ変ですか」とか「他の家はそうしてないのですか」、「いや中学校くらいになるとね、大体嫌がるものですけどね」とやんわり伝えながらです。そういう意識をちょっとずつ作っていくみたいですね、そういう中で親と子の距離ができてくるみたいですね、そういう必要はあるかと思えます。そういうところが、全く見えてない。感じていない家族、親は結構いると思います。ちょっとずつ親と情報を共有しながら斥力が働くような関係をどうやって作っていくかというのを考えていく必要はあるかなと思います。

質 疑 応 答

松下：はい、ありがとうございました。三名の先生方のお話をより詳しく伺いできたかなと思います。

ここからは、フロア全体に広げて、ディスカッションをさらに深めていけたらなと思っております。シンポジストの先生方のお話をお聞きになって、そして先ほどの先生方の中でのディスカッションをお聞きになって、いろいろご質問とか、あるいはご感想とか、いろいろなことが浮かんでおられるかなと思います。貴重な機会ですので是非ご発言いただければと思います。いかがでしょうか。

フロア 1：（※事例に関する鳥井先生への質問のため割愛させていただきます。）

鳥井：（※事例に関する回答のため割愛させていただきます。）

松下：ありがとうございました。それでは、他のご質問とか、ご意見とか、いかがでしょうか？

フロア 2：野末先生の質問をさせていただきたい。夫婦関係の家族療法ということで、ご夫婦が、お話の中に出ていたと思います。キンダーで、たった月 1 回でなにができるのかと、思いながら、「月 1 回で何ができるのだろう」と思いながら聴きました。背景として私自身が 18 年間、保育士をしていました。そこから臨床心理士資格取得。一定の施設での経験を積んでいた。施設で保護者に会うことはないですが、子どもの状況をアセスメントするとき背景・生育歴をいくつも目にしました。それで、一定の親子関係のパターンが見えてきている。子どもさんがこういう表現をされるのは、どういう家庭事情があったのかな。見る癖がついていきました。そういうベースを持

ちながらキンダーの仕事をしていく中で、基本は先生方には何をどう困っているか、いつからその困りごとが始まったのか、保護者の状況も聞くようにしていました。その中で徐々に先生方の視点も変わってきてカウンセリングに送ってくださるっていうのが増えてきました。枠に入りきらない状況が、今、あります。その中で思うのは、おばあちゃん存在がすごく大きいこと。それを、今、思っています。お母さんに来談にきて欲しいのに、1回目は、おばあちゃんとお母さんが来られる。お母さんは離婚をされて実家にもどられているという状況でした。1回目は親子で来られた。2回目以降はおばあちゃんが来られることになった。しかも、その子どもさんは、「幼稚園では、これといった問題は感じられない」という、お子さんの困りごとを、おばあちゃんは持って来られる。その都度、おうちでの様子をお聞きしました。おうちでそれだけ、自分を出しているのは、一つはとてもおうちが安心できる場であることをベースとしてお伝えしながら、お母さんに子育ての主役になってもらいたいと思いました。そこをどういう風におばあちゃんに伝えていくかっていうところでかなり悩んだ。月1回しか行かない中でも結構、3年くらい通っているんですが、4、5回おばあちゃんが来られた時点で思い切ってその話をさせてもらったっていうのが一つあったんですけど、どれがよかったんかなっていう風なことであるとか、あともう一つのケースは、お嫁さんとおばあちゃんが来られたっていうので、お嫁さんなので息子さんのお嫁さんなんですけど、そこで同居されてるんですが、夫婦関係が破壊しているとか破綻している中でのお姑さんが、すごく修復作業をしているように見えるんですけども、これ本当はどうなのかなっていうところが、まだおばあちゃんが1回目こられて、次おばあちゃんがお嫁さんを連れて来られて、まだ2回目なので、私もどうかかわっているのが見えてこないっていうもどかしさがあります。その中で、確かにおばあちゃんが動くということはおばあちゃんが力があるっていうことなんですけども、その辺をどのように関わっていったらいいのかなっていうのが正直なところ、お聞きできたらと思います。長くなってすみません。

野末：多分ちゃんとお答えするにはあと一時間くらいお話をうかがわないと分からない感じがしています。(笑) 今のお話からだけでいうと、まず一つはそれこそ「どこまでするか」が問題だろうなというのが一つあります。家族とか夫婦の問題ってやっぱり、自分が援助している機関とかメンバー構成とか、その機関の目的とか、あるいは自分が何を学んでいるかということによっても大分違ってくると思うのでまた、月に1回とかいう構造とかによっても違うので、その中でご自分がやれることを最大限やるしかないというのがまず大前提だと思います。おばあちゃん云々というのは、確かにそういうご家族っていっぱいあるなと思っていて、家族にもものすごく大きな影響を与えているおばあちゃんはいても、同じように大きな影響を与えているおじいちゃんというのは見たことがないですね(笑)。あまり極論ではないような感じがしています。例えば、おばあちゃんが孫のことを色々心配して言うてくる。実際に、園では子供のことは問題がないみたいなことであれば、もしかしたらおばあちゃんは孫のことを言いながら実は娘のことを色々心配しているのかもしれないと思ったりしました。そういう意味では、私は迷います。つまり子育ての主役は、母親ないし、最近父親もそうです。親であるべきかどうかもわからないという感じもある。つまり標準的な家族で言えば、子育ては今の日本ではまだ母親が主で、父親は少しそれを手伝う。

それが標準といえは標準なのかもしれません。例えば、離婚家庭、あるいは経済的に大変な家族の場合、単身赴任、様々な状況があります。それで、かなり、おばあちゃん、おじいちゃんが一生懸命せざるを得ない状況も多々あると思います。なので、そこには、さきほど内田先生がおっしゃった世代間境界の問題も絡んでくるのですが、誰が主役で子育てをするべきかという、こちらが考えることと、家族の状況がどれほどマッチするのかっていうことは考えなきゃいけないなと思います。おばあちゃんがあまりにも、全面的に出てくる場合はとりあえずおばあちゃんとうまく繋がった上で、もしやはりこの子どものことに関してはもうちょっとお母さんに出てきてもらいたいということであれば、うまくおばあちゃんを介してお母さんを引っ張り出すしかないのかなと、そんな抽象的な話になってしまっていますが、そんな風に思いました。

松下：よろしいでしょうか？そしたら、他にはいかがでしょうか。

フロア 3：失礼します。鳥井先生の事例のお話がありました。内田先生のこのプリント、レジュメの方に新しい学校の形とある。鳥井先生の事例の通りの働きをしたら（笑）、過労死のレベルになるかもしれないと思います。今、スクールソーシャルワーカーも学校に、たくさん入っている。この新しい学校の形を見ましたら、かなり外部に助けを求めないと、先生が倒れるのではないかなと思いました。今後もし言ったら先ほども言いました家庭訪問も含めて、教師が 12 時間とか 13 時間とか働かなきゃいけないと思うんですけど、その事例を、この新しい学校の形に当てはめた場合に、どういう運用ができるのかなって思いながら話を伺ってたんですけど、そのあたりまた教えていただけたらと思います。

内田：私でいいですかね？ちょっと感想を。後でまた鳥井先生の方からも言っていただきますけどね。私も学校の先生たちの話をしながら、鳥井先生の話聞いて、本当にいろいろ思っていますね、学校でこれをよくやられたなという思いと、そこまでできるっていうのは大変なことだろうなって。ただ、先ほど少し言われていた、やはり、先生自身が心理学も勉強、学んでおられ、そういう基礎的な知識もあった。その背景もあったと思います。私自身は、この新しい学校というのを考えて、これからの学校は、こういう方向に進んで行くことになるだろうと思いました。つまり少し役割を分けて分業していくことはあるかなと思うんですけどね。ただ、もう一つは、別の考えがあります。さきほど、私はこれ、どこまでするのでしょうか、とお聞きして、先生も、それはどこまでしたらよかったか、悩みながら、本当にこれで良いのだろうか、ただ必死にされてきたと言われてました。おそらく、さきほどの A の保護者は、学校だから来れたという側面が強いと思いますね。ですから、当然こういう保護者に「ちょっと相談機関があるんで、どうでしょうか」って言って、そこに行くとはとても思えないところはありますね。ですから、学校というところにいろんな形で保護者が相談に来る場合もあるし、いろんなことを言いにくる場合もあるし、主張しにくる場合もある。いろいろな思いを抱えてこられますね。ですから僕は学校にそういういろんなものが投げ込まれていっている部分はあるかなと思いますね。それを先生方は必死で対応していると思います。それは本当にその通りだと思ったんですけど、鳥井先生がそれはどこまでやるかって言われると、それは学校にとって必要なところまではやるんだ、ということですね。ですからやっぱり子どもを見ていく学校として、やっぱり保護者にそこまで関わる必要

があるということであれば、当然そういうふうなところまである程度抱えていかないといけない。ただこれからはですね、先ほど私が示したように、先ほどもおっしゃったスクールカウンセラーというのは今全中学校に入っていますよね。ほとんどの小学校にも入っていますね。おそらく、全小学校に入るようになると思いますね。そして、スクールソーシャルワーカーもかなりの部分今入っています。おそらくこれから5年10年後には全ての学校に入る時代が来ると思いますね。もっと言うと、スクールカウンセラーが週何日間か学校に行く、いる時代、いわゆる常勤化していく時代が来ると思いますね。そうなった時に、今は、鳥井先生が中心になって動かれた部分を、もう少し他で、例えば、福祉の専門家の人が家庭訪問したり、保護者と繋がったり、あるいはスクールカウンセラーが保護者と会ったりする。もう少し、広く役割を取っていくってことが、今後起こりうるかなと思います。ただだからと言って教員がもう一切それはお任せ状態でいいかという、そうはならないだろうと思うんでね、その辺りがどんな風にそこを連携していくかというのはまだ見えないところです。ただ、もう少し他の部分のウェイトが強くなることは、確かだと思います。ただそれを学校のなかでどうコーディネートして、どんな風にして教員がそこに関わって行くかって言うのはまだ模索段階かなというように私には思いながら、ちょっとこういう図を描いてみて、綺麗にこう別れているように描いてますけど、実際のところはなかなかそうはいかないところも多いかなというように思います。ちょっとお答えになっているかどうかかわからないです。

鳥井：ありがとうございます。私も今日出した事例の形が良いです、これをどうぞ、みたいなどは決して思っていません。ただこれを出したのは、さきほども申しましたように、対応に困られている先生方が多くいるっていうことを身近に感じているので、対応の部分で、少しどこか要素で使えるものがあれば、どこかの要素、一ヶ所でも、ちょこつ、ちょこつ、と使えるものを、という意味で出させていただいています。この対応の全体像をお勧めしているというわけではございません、部分だけをお勧めしているというような形のつもりです。全国的にも、京都市でも対応の難しい親御さん、ご家庭、支援の必要なご家庭に対して、教育委員会中心にサポートしていくシステムも作り始めている状況ではあります。今後その辺り中心にサポート体制が変わってくるだろうと思っております。本来は、教師というのは勉強を教えるのがメインで、子供たちと過ごすのがメインで、っていう仕事かなと思いますので、保護者の方との連携っていうのは、やはり教員としては、子供を理解していく上で、協力して関わって、やりととしてっていうものであり、必ず保護者の方と関わるということは大事で必要であると思うのです。どこまで抱えるかっていうことは、これからどんどん変わっていくかなと思いますし、私個人としては変わった方がいいと思っております。内田先生がこのように描いてくださっている部分も、私からするとすごく理想というか、こういう風になればいいなと思いながら見ておりました。やはり専門性というのがそれぞれありますので、今回私がたまたま少し心理をかじっていたというベースがあったので対応できた部分はあったかなというのも正直思います。自分が、どこまでできるのかを考えながら、その役割、役割で考えながらしていくことが、大事と思っております。そんな感じでよろしいですかね、すみません、うまく話せませんが。以上です。

松下：よろしいですか？そうしましたら、そろそろ時間になりました。短いご質問でしたら、一つだけなら可能と思います。いかがでしょうか？

フロア 4：どうもありがとうございます。本当に、色々な自分の関わりなんかを振り返り反省しながら聞かせていただきました。それで時間が短いので一つだけ。鳥井先生に質問させていただきたいです。先生が向き合わざるを得ない状況の中で、向き合っただけ。そのことで、とても、すごく勉強になる抱え方を聞かせていただきました。先生はスクールカウンセラーに支えられたと、何度か言っていただきました。この時先生が向き合われてスクールカウンセラーがどのような支えをされていたのか、どう役に立っていたのか、その辺をぜひお聞きしたいと思います。特に小学校で仕事をしていますと、担任の先生が関わるだろうという、そういう文化があります。担任が、生徒さんと関わり合うときに、スクールカウンセラーはどのように先生方を支えたらいいのか。そういうところをお聞かせいただきたいです。よろしくお願いします。

鳥井：ちょっとまとまってお答えできるかわかりませんが、まずスクールカウンセラーの先生は教員を、その時の先生は教員がやっていることを否定しなかったってことはすごくありがたかったなと思っています。自信なくやっているところもたくさんございましたし、失敗して落ち込んでいることもたくさんあったのですが、そこを責めなかったっていう部分、すごく支えていただけたかなと思います。あと、やはり私は教師としての立場から教師としての視点で動いていたので、そこで見えていないものっていうのが必ずありましたので、その辺りこぼれ落ちている部分を拾い上げて伝えてくれたっていうのはすごくありがたかったなと思います。それから、私がうまく全体に伝えることができない心理学的な視点、全教員にわかりやすく説明してくださったことも有難かったと思います。あとは、いろんな教員の、これは私に限らずですが、やはり忙しいので、同時に五つも六つも仕事をこなすような生活なので、自分からスクールカウンセラーさんの方に声をかけていくっていうのがなかなか後回しになってしまう状況がありましたので、スクールカウンセラーさんの方から声掛けをしにきてくださって、話を聞ける機会というのを設けてくれたっていうのもありがたかったですし、非常に忙しい仕事ではあるので、ゆっくり話をしようみたいなスタンスだと思うと逆にストレスになった。そのときに可能な、本当に短ければ1分程度、2分程度でできることを最大限、その状況のなかで選択しながらやってくださったという部分があります。

松下：ありがとうございます。それでは時間がまいりましたので、午前の部のシンポジウムをこれにて閉じさせていただきたいと思います。シンポジストの先生方、ありがとうございました。(拍手)